



No.120  
2018.10

医薬品リテラシーの育成と活用を目指す広報誌

# RAD-AR NEWS

レーダー ニュース

シリーズVol.18 黒川理事長がトップに聞く!

大塚製薬株式会社 代表取締役社長

イノベーティブな薬剤で  
あればあるほど、  
適正使用が重要です。 2

**樋口 達夫氏**

協議会の事務所が  
移転しました!

新住所は裏表紙を  
ご覧ください。

一般社団法人 くすりの適正使用協議会	6
第3回定時総会を開催	6
会員・代表者一覧	7
<b>Special Interview</b>	
長寿と寄り添う社会に向けた新聞社からの提言	
産経新聞東京本社 産経編集センター記者	
道丸 摩耶 氏	8
トビラの向こうへ Door 02	
誰もが相談できる環境を…妊娠・授乳サポート薬剤師が活躍	
愛知県薬剤師会	10
<b>新連載</b> 患者さんと医療者のいい関係	
Series 1 コンコーディンスという考え方	12
患者さん・一般の方向け情報資材	
「バイオ医薬品ってどんなもの?」公開!	14
黒川の手帖	
～打ち込めるもの～	15
PICK UP TOPICS	15
薬についてのソボクなギモン	
～薬袋を1つにまとめてもらうことはできるの?～	16



## 黒川理事長が トップに聞く!

Vol.  
**18**

ひぐち・たつお

1977年大塚製薬入社。  
米国ファーマバイト コーポ  
レーション社長・最高経営  
責任者、大塚製薬専務取  
締役、社長代行、取締役副  
社長、大塚アメリカファーマ  
シューティカル社長・最高  
経営責任者などを歴任。  
2000年大塚製薬代表取  
締役社長(2008年6月ま  
で)、2008年大塚ホール  
ディングス代表取締役社  
長に就任。2015年2月から  
大塚製薬社長を兼任。



## 【大塚製薬は 適正使用の「49ers」】

——黒川理事長、まずは大塚製薬の印象に  
についてお聞かせください。

**黒川** まず4月の抗精神病薬「レキサル  
ティ」の発売、まことにおめでとうございま  
す。統合失調症の新たな治療の選択肢と  
して、患者さんの健康と幸福に貢献される  
ものと期待しております。御社は、1971年の  
カルボスチリル骨格の発見を創薬の起源

とされ、その後半世紀近くにわたって着実  
な歩みを進めてこられました。今回の新薬  
はその成果の一つで、とても素晴らしいこ  
とと思っております。

**樋口** 黒川理事長とは年代も同じ、たまた  
ま名前も同じですから以前から親近感を  
持たせていただいています(笑)。日頃か  
ら様々なご指導をいただいており、大変お  
世話になっております。

大塚グループは、1921年に徳島県の鳴門  
でスタートしました。鳴門は瀬戸内海に囲

# 黒川 達夫

一般社団法人くすりの適正使用協議会 理事長

通  
×  
達  
夫  
氏



レキサルティ

# イノベーティブな薬剤であればあるほど、適正使用が重要です。

まれ、塩田の技術が培われてきました。戦前は無機塩を抽出し、工業原料の供給メーカーとして活動し、戦後は輸液から一般用、そして医療用の治療薬へと活動を広げてきました。

黒川理事長が言われた通り、1971年に研究所を立ち上げ自社創薬をスタートさせました。当初14人だった研究者は、今では世界で約1,000人を数えます。医薬品の研究開発には時間がかかります。コツコツと積み上げ、それを臨床に反映していくのは容易なことではありませんが、大塚にしかできないこと、大塚だからできることに取り組む、そうした企業文化を拠り所として活動を進めています。

**黒川** 10数年前に、別の形でも一緒にお仕事をさせていただきましたが、その際感じたのはダイバーシティです。いまでは当たり前かもしれません、当時から女性の担当者の方、若手の方がいきいきと活躍されていたことが印象に残っています。そこに私は、日本の将来の姿を見たような気がしました。

**樋口** ありがとうございます。大塚 明彦 大塚ホールディングス前会長もダイバーシティを極めて大切にしていましたから、1970年代から海外へ進出し、様々な国の人たちとディスカッションしながら仕事を進める中で、いくつものイノベーションやアイディアが生まれました。現在、大塚ホールディングスには女性取締役が2人おり、大塚製薬でも取締役や執行役員、部門長として活躍している女性が多くいます。優秀な人を登用した結果、たまたま女性だったということだと思います。

**黒川** 協議会の活動についても、設立当初からご参画いただいています。アメリカのカリフォルニアに最初に入ってきた開拓者を「49ers（フォーティナイナーズ）」と言うそう



ですが、まさに医薬品の適正使用推進、薬剤疫学の推進の49ersとして、現在に至るまでお力添えをいただき、またリーダーシップを發揮していただいています。

**樋口** 大塚製薬は、「Otsuka-people creating new products for better health worldwide」を企業理念に掲げています。革新的な製品を創造していくためには、われわれは挑戦し続けなければなりません。新しいメカニズム、新しい治療の提供を実現するうえで、ベネフィットとリスクは必ず裏腹になります。われわれの歴史の中で、薬の安全性や適正使用は常に非常に大きな関心を寄せてきた問題なのです。

## 信頼性の高い情報に アクセスする機会を

——薬の適正使用では、薬機法の改正で国民の役割が初めて規定されました。

**樋口** 従来は、主に供給側である医薬品メーカーが、医療関係者を通じて患者さんに情報を伝えてきたわけですが、薬が

特性として併せ持つベネフィットとリスクを十分理解したうえで適正に使っていたくためには、双方向のアプローチが重要な時代になってきています。今回の新しい法律は非常に画期的で、時代のニーズを反映してステージを一歩進めたものだと思います。

**黒川** 大塚製薬をはじめ創薬メーカーが生み出した新薬は、人類の20万年の歴史の中で初めて体に入る物質です。それが全身をグルグルと回るわけで、その時何が起こるのかを完全に解明するのは容易ではありません。ですから患者さんも医師も薬剤師も家族も、注意深く薬の効果と安全性を見極めていく必要があります。そこを支えるのは、科学的なファーマコビジラントや薬剤疫学、臨床データになるわけです。

今の課題は、そのような情報をいかにわかりやすく患者さん、あるいは医師・薬剤師の方々に伝えて理解していただき、業務内容や服薬行動に反映していただくかです。新薬が持てる力を十分に発揮できないことほど悔しいことはありません。健康はすべて

# 樋口 達夫

大塚製薬株式会社  
代表取締役社長



黒川理事長が  
トップに聞く!

Vol.  
18

# 黒川 達夫

一般社団法人くすりの適正使用協議会  
理事長



の人々にとってかけがえのない財産です。薬を適切に用いて健康を回復し、社会の現場や家庭に戻っていく。そのお手伝いすることこそ、協議会の存在意義なのです。

**樋口** 協議会の活動のみならず、われわれ製薬企業や医療関係者の皆さん、また学校なども含め、さまざまな形で薬に関する情報にアクセスできる機会をつくることが極めて大事だと思います。特に子どもの時に情報に接することで、その後の人生の曲線はかなり変わってくるのではないかでしょうか。情報が広く国民に行き渡るようになれば、病院に行くか否かの判断もしやすくなり、より健康に対する知識も深まってくるのではないかと思います。

**黒川** 一方で、インターネット上には、必ずしも信頼できない健康や薬に関する情報が氾濫しています。信頼性の高い情報をどうやって必要とする方に届けるか。ここはなかなか難しいところです。法律ができるからといって一晩で世の中が変わるものではありません。これは大変大きなテーマで、協議会だけではとても実現できません。

そのため、同じような理想を掲げる団体の方々と協力し、今年3月に6団体共同でのステートメントを発表しました。健康を願うプロフェショナルとメディア、当事者である患者さんが、様々な角度から自らの強みを活かし、シナジー効果を持って世の中に訴えていくものです。かかりつけ医師や薬剤師を持つことなどの大切さを共同で皆さんに投げかけました。今後これをどう継続、拡大、発展させていくのかも、協議会にとって取り組むべき大きなテーマです。

**樋口** 情報の正確性の判断は、発信元の信頼度にかかる部分が大きいと思います。その意味で、受け手側である患者さんの団体、メディアの方、さらに情報の質をコントロールする製薬業界や医療関係者の方々などステークホルダーが連携した意味は

非常に大きいですね。

情報の質を担保するという意味で大切な基盤、インフラになっていくのではないでしょうか。

## 小中高生への健康に関する教育にも注力

——幼少期からの医療教育、くすり教育や啓発活動については、大塚製薬でも長年取り組んでいらっしゃいますね。

**樋口** 世の中に役立つ基本的な知識を伝えていくことが教育の役割だと思います。自分の身体のことや、身体を健康に保つための努力、病気になると身体はどうなるのか、といった内容について、早い段階から関心を持ってもらうことはとても大切なことです。学びの機会を多く与えることが重要だと考えています。

当社では、本社、国内の7工場、そして徳島にある能力開発研究所というユニークな施設で見学者を受け入れています。2017年度は、全国の小・中・高校270校の児童・生徒約1万1,000人、大人も含めると4万人以上の方に訪問していただきました。薬がどうつくられるのかを学び、関心を持っていただききっかけづくりになっていると思います。

また、日本医師会と協働で全国の小学校、中学校に「まんがヘルシー文庫」を無償で献本しています。1989年から約30年にわたって継続して取り組んでいるので、身体のメカニズムや病気や食事、薬の話などを取り上げ、毎年一巻ずつ発刊しています。子どもたちが楽しみながら学んでくれればと考えています。

**黒川** 受け手に寄り添った形で情報提供をされていらっしゃるんですね。協議会でもまんがのパンフレットを作成しており、教育現場から好評をいただいているまずは



OTSUKAまんがヘルシー  
文庫全28巻

関心をもって読んでもらうことが一番です。

施設の見学会をこれだけの規模で実施されているのは本当に頭が下がります。そこで見たものが本人の記憶になって残り、その後の人生で薬に対する態度が大きく変化していくことでしょう。大人も含めて毎年4万人、これが時を重ね、40万人、400万人と増えていくことで、社会そのものを見ていく力になると思います。

——「アンチ・ドーピング」にも力を入れていらっしゃいます。ほかの医薬品メーカーさんにはあまりない特徴かと思いますが、この狙いについてご紹介ください。

**樋口** 大塚製薬の医療関連事業と並ぶもう一つの柱に、人々の健康維持・増進に貢献する飲料・食品を取り扱うニュートラル・ティカルズ関連事業があり、科学的根拠に基づいた製品の研究開発、製造販売、情報提供を行っています。こうした取り組みを通じてスポーツ医科学分野で得た知見や啓発活動の経験を活かし、禁止されている薬物に手を出してしまうことを防ぐための啓発はもちろんのこと、風邪薬などを安易に飲んでしまう「うっかりドーピング」をなくし安心して競技に取り組める環境づくりをサポートしています。そのひとつとして2018年インターハイ(7-8月、東海地方)に向けて、「高校生のためのアンチ・ドーピング講座」を静岡県薬剤師会にご協力いただき実施しました。ジュニアの頃から国際大会に出場する選手もいますから、ジュニアアスリートや彼らをサポートする方々にも薬についての知識を深めてもらいたいと思っています。

**黒川** アンチ・ドーピングは、スポーツ本来のフェアプレーの精神にもつながりますね。若いうちから適切な知識を得ることはとても有意義なことだと改めて思います。

## ■ 適正使用を実現する 剤形開発

——医療用医薬品の適正使用についての取り組みもご紹介いただけますか。

**樋口** 世界で初めて「心不全、肝硬変における体液貯留」の適応を得た「サムスカ」という利尿剤があります。体内の余分な水



アンチドーピング  
勉強会2018  
(静岡翔陽高校)

分だけを排泄して浮腫やむくみを改善します。市販後の段階で、患者さんによっては高ナトリウム血症や肝機能障害が起こるリスクもあるということがわかつたため、適正使用の徹底を呼びかけています。

また、この薬は遺伝性の希少疾患である常染色体優性多発性のう胞腎<sup>\*1</sup>の治療にも用いられています。これまで有効な治療法がなく、透析に移行してしまうとQOLが大きく低下します。こちらの適応においても、適切な肝機能検査や血清ナトリウム濃度のモニタリングが必要です。2014年の承認以降、日本で実施してきたのと同様に、本年承認が得られたアメリカでも、患者登録から治療にあたる医師の登録と研修、調剤する薬局の登録、処方箋を本人が薬局で受け取る際の認証まで、REMSというリスク管理システムに規定し、大塚製薬はその確実な運用に取組んでいます。

**黒川** 製品が採用されたら終わりではなく、製品を確実に使っていただくための仕組みまで責任を持つということですね。

**樋口** そうです。特にイノベータイプな薬剤であればあるほど、適正使用はきわめて重要です。薬は定められた範囲の中で使われてこそ、その良さが発揮されるのです。

**黒川** 大塚製薬の製品には、どのようなご病気であれ適正に使用されるよう製剤的な工夫も徹底されていますね。

**樋口** 服薬アドヒアランスの維持のために、製薬企業の立場でできることを考えいく必要があります。製剤開発で問題が解決できるのであれば、当然取り組むべきだと思います。たとえばアメリカでは、統合失調症の治療を約300万人の方が受けていますが、6割の方は途中で脱落してしまいます。

ます。服薬アドヒアランスが悪化すると病気も悪化し、再び薬を飲み始めても回復するとは限らないという非常に難しい治療です。そのため、経口ではなく、筋肉注射により4週間持続的に効果を発揮する製剤を開発しました。

また、パーキンソン病治療の場合もご紹介しますと、従来の経口製剤では、薬剤の血中濃度を24時間一定に保つことが難しく、「夜間寝付けない」などの睡眠障害や「早朝に体がこわばる」といった運動症状など、患者さんや看護をされている方にとて大きな課題がありました。24時間安定した血中濃度を維持することは、われわれが想像する以上にベネフィットがあるということで、経皮吸収型製剤を本邦にて臨床開発しました。これも剤形開発における一つの貢献の形だと思います。

——協議会への期待、ご要望についてお聞かせいただけますか。

**樋口** 今年6月から、かつて務めさせていただいていた東京医薬品工業協会(東薬工)の会長を再度お引き受けすることになりました。東薬工では、医薬品の品質や安全性の問題などの研究会、委員会活動にも取り組んでいます。協議会との連携を深めて両団体と一緒に何か取り組めればと思います。

**黒川** ぜひとも共に活動できればと思います。本日はどうもありがとうございました。

## 大塚製薬株式会社の 「くすりのしおり®」掲載状況

日本語版	89種類 (100%)
英語版	84種類 (94%) <sup>**2</sup>

\*2 患者さんが使用する(服用等を行う)製品について  
は100%

\*1 常染色体優性多発性のう胞腎—腎臓に囊胞(水がたまつ袋)がたくさんできて腎臓の働きが徐々に低下していく遺伝性の病気



一般社団法人 くすりの適正使用協議会

# 第3回 定時総会を開催

## 各団体と歩みを揃え啓発活動を推進

くすりの適正使用協議会は、2018年6月13日、第3回定時総会を開催しました。この中で、黒川理事長は、当協議会は小さな団体であるため、より大きなレバレッジ効果を期待すべく、健康や医療に関わる各団体との協働に尽力し、成果の第一歩としては、6団体共同で3月に発表したステートメントにより、現在の医療・医薬品情報に対して多少なりともシグナルを発信できたと一年を振り返りました。

今後の展開としては、関係する団体はそれぞれに強みを持ち各々活動を展開しているが、各団体との協働により、より生産性の高い種々の啓発活動に着手し、患者さんの服薬行動の変化を実感できるように、そして、薬の適正使用の価値観が高まるよう努力していきます。

また、当協議会のホームページは、Google検索の上位に表示されるようになり、くすりのしおり<sup>®</sup>の閲覧回数は一年で10倍以上に達しました。このことは、当協議会

の発信する情報が信頼に値するものとの位置づけを獲得しつつある証と感じています。この評価をさらに高めるため、東京オリンピック・パラリンピックに向けた、英語版くすりのしおり<sup>®</sup>のさらなる充実も、会員各社に協力を依頼しました。

今年度展開する事業としては、製造販売後調査の中で、データベースを活用した検討が推奨されたことから、安全性の新しい評価制度に対応したセミナー等を実施すること、昨年度から制作しているバイオ医薬品の適正使用に資する啓発資材を活用し、医療者に加え一般向けにも啓発活動を展開することなどを発表しました。

今回の総会での審議事項は、2017年度の事業報告と決算の承認、役員の改選で、これらは、全て満場一致で承認され、代表理事には黒川理事長が再任されました。

### 役員一覧

理事長	黒川 達夫	一般社団法人 くすりの適正使用協議会
副理事長	高橋 洋一郎	一般社団法人 くすりの適正使用協議会 <b>新任</b>
理事	押田 卓也	アステラス製薬株式会社
	赤名 正臣	エーザイ株式会社
	高木 浩樹	塙野義製薬株式会社 <b>新任</b>
	荒井 美由紀	第一三共株式会社
	原 信行	大日本住友製薬株式会社

理事	古山 直樹	武田薬品工業株式会社
	小林 義広	田辺三菱製薬株式会社 <b>新任</b>
	大箸 義章	中外製薬株式会社
	西村 健志	日本新薬株式会社
	川音 聰	ノバルティス ファーマ株式会社
監事	山下 修	Meiji Seika ファルマ株式会社 <b>新任</b>
	三輪 亮寿	三輪亮寿法律事務所

# 一般社団法人 くすりの適正使用協議会 会員・代表者一覧

※50音順、敬称略 (2018年7月2日現在)

## 製薬企業会員 (23社)

 <p>旭化成ファーマ株式会社 代表取締役社長 兼 社長執行役員 <b>青木 喜和</b></p>	 <p>アステラス製薬株式会社 執行役員 メディカルアフェアーズ本部長 <b>押田 卓也</b></p>	 <p>アストラゼネカ株式会社 代表取締役社長 <b>ステファン・ ヴォックスストラム</b></p>
 <p>アッヴィ合同会社 社長 <b>ジェームス・フェリシーアー</b></p>	 <p>エーザイ株式会社 取締役 代表執行役 CEO <b>内藤 晴夫</b></p>	 <p>大塚製薬株式会社 取締役 信頼性保証本部・PV・薬事・ メディカルアフェアーズ担当 <b>芹生 卓</b></p>
 <p>キッセイ薬品工業株式会社 代表取締役会長 兼 最高経営責任者 (CEO) <b>神澤 隆雄</b></p>	 <p>協和発酵キリン株式会社 代表取締役会長 <b>花井 陳雄</b></p>	 <p>興和株式会社 代表取締役社長 <b>三輪 芳弘</b></p>
 <p>サノフィ株式会社 代表取締役社長 <b>ジャック・ナトン</b></p>	 <p>塩野義製薬株式会社 代表取締役社長 <b>手代木 功</b></p>	 <p>第一三共株式会社 代表取締役会長 兼 CEO <b>中山 讓治</b></p>
 <p>大正製薬株式会社 取締役会長 <b>上原 明</b></p>	 <p>大日本住友製薬株式会社 代表取締役会長 <b>多田 正世</b></p>	 <p>武田薬品工業株式会社 取締役 ジャパン ファーマビジネスユニット プレジデント <b>岩崎 真人</b></p>
 <p>田辺三菱製薬株式会社 代表取締役社長 <b>三津家 正之</b></p>	 <p>中外製薬株式会社 代表取締役社長 最高経営責任者 <b>小坂 達朗</b></p>	 <p>東和薬品株式会社 代表取締役社長 <b>吉田 逸郎</b></p>
 <p>日本新薬株式会社 代表取締役社長 <b>前川 重信</b></p>	 <p>ノバルティス ファーマ株式会社 代表取締役社長 <b>綱場 一成</b></p>	 <p>ノボ ノルディスク ファーマ株式会社 代表取締役社長 <b>オーレ ムルスコウ ベック</b></p>
 <p>マルホ株式会社 代表取締役社長 <b>高木 幸一</b></p>	 <p>Meiji Seika ファルマ株式会社 代表取締役社長 <b>小林 大吉郎</b></p>	<p><b>特定会員 (174社)</b> <b>個人会員 (6名)</b></p>

## 賛助会員 (6社1団体)

株式会社EMシステムズ 取締役社長 <b>大石 憲司</b>	シミック株式会社 代表取締役 社長執行役員 <b>藤枝 徹</b>	ソニー株式会社 harmoni事業室 室長 <b>福士 岳歩</b>	日本医師会ORCA管理機構株式会社 代表取締役 <b>上野 智明</b>
株式会社グッドサイクルシステム 代表取締役 <b>遠藤 朝朗</b>	株式会社ズー 代表取締役社長 <b>藤井 修亮</b>	日本OTC医薬品協会 会長 <b>佐藤 誠一</b>	

## 長寿と寄り添う 社会に向けた新聞社からの提言



産経新聞東京本社  
産経編集センター記者

**道丸 摩耶 氏**

### Profile みちまる・まや

東京都出身。聖心女子大歴史社会学科卒、2000年産経新聞入社。支局、東京本社社会部（遊軍、警視庁、厚生労働省）、文化部（生活情報）などを経て、現在は「100歳時代プロジェクト」を担当。医療と報道の相互理解をテーマとした講演多数。小学生の頃から歴史専門雑誌『歴史読本』（現在休刊中）を愛読する根っからの歴女。

### 昨秋スタートした 「100歳時代プロジェクト」

—「100歳時代プロジェクト」とはどのような企画でしょうか。

出生数の減少、高齢者の激増、社会の支え手の不足、日本全体としての人口減少など、複合的な要素への問題意識から2017年10月にスタートした企画です。今後、社会構造が大きく変わることが予測されていますが、その変化は非常にゆっくりです。子どもの頃は活気があった商店街が、いつの間にかシャッター商店街になっているような、“静かなる有事”への危機感が企画の背景にはあります。

その一方、医療技術の進歩などによって私たちは100歳まで生きることが当然になりつつあります。縮小と延伸という二つの基軸から「新しい人生のあり方と将

来の課題解決」に向け、紙面を中心に幅広く発信していくことを掲げています。

### 私自身は100歳まで 生きたいタイプ（笑）

—「100歳時代」という言葉にはどのような印象を持ちましたか。

この4月からプロジェクトチームに配属され、最初の話題となったのは「自分たちは100歳まで生きたいのか」という核心の部分でした。私自身は100歳まで生きたいと考えるほうでしたが、ちょっと難しいのではないかという意見も少なからずありました。議論を通じて感じたのは「一体どのような社会であれば100歳まで生きたいと思うのか」ということです。

100歳を迎えると身体にどのようなことが起こり、また何に困り、そのために今



### 100歳時代プロジェクト

目に見えない問題と、見えている将来の課題解決に向けた企画。『ヘルスケア』『ライフプラン』『安心・安全社会』を3大テーマとして掲げ、それぞれの課題について有識者らが紙面で発信。道丸氏はヘルスケアを担当。

# “どのような社会であれば 100歳まで生きたいと思うのか”

の自分は何を準備し、備えなければいけないのか。そういった部分まで紙面の中で提示することが、プロジェクトの鍵になるのではないかと思っています。

## ——「100歳時代」と医薬品産業についてどのような考え方をお持ちですか。

100歳時代という言葉は確かにわかりやすく、目標にしやすいかもしれません。ですが、病気を患って早く亡くなってしまう方もいます。プロジェクトでは、100歳まで生きることだけを取り上げるつもりではなく、早逝も時代の側面として取り上げなくてはいけないと思っています。それは時間に関係なく、最期まで自分らしく幸せでいることも含めて「100歳時代」であると考えるからです。

医薬品産業は、薬を用いて病気を治し、また少しでも軽くすることを命題に取り組んでいると思います。一方で、製薬企業が置かれている立場は非常に厳しいものです。薬の開発には長い時間と多額の投資を必要とするにも関わらず、薬価収載されれば「高い」と指摘されて値段を大幅に引き下げられてしまう状況は、想像以上の苦労があると思いますが、薬を通じて患者さん・一般の方を幸せにするというミッションにこれまで以上に力を注いでいただければと思います。

## リテラシー向上は 100歳時代の課題

## ——患者さん・一般の方は薬をどう捉えていると思いますか。

薬に対する知識がまだ不足していることを強く感じます。また、情報を発信する側と受け取る側の「解釈の乖離」を感じずにはいられません。

例えば残った薬を家族みんなで使いま

わしていたり、抗菌薬の使用は必要最低限に留めようと国や関係者が動いているにもかかわらず、患者さん側が医師に多めにリクエストするなど、薬を軽く見ている印象を受けます。

東日本大震災が発生したとき、病名や何か薬を飲んでいたことはわかるものの、肝心な薬の名前がわからないということが生じたと聞きました。今ではお薬手帳の活用でこうした状況は改善されつつありますが、皮肉なことに震災を通じて関心の低さが浮かび上がったのではないかと思います。

製薬企業のホームページなどでは、副作用情報をはじめ、用法・用量、注意することなどが網羅的に掲載されています。これらは関係法令にのっとり適切に行われていますが、こうした情報は患者さんにはあまり届いていません。

また、患者さんの目線で見ると、医療情報には専門用語や難解な言葉が多く、とりあえず専門家に任せておけばいいと思うのは自然なことかも知れません。これは現在まで日本の医療関係者が患者さんと真摯に向き合い、騙したり裏切ったりすることなく治療してきた証、「任せておけば大丈夫」という絶対的な信頼があるからです。このような医療関係者と患者さんの揺るぎない関係は、国民皆保険による恩恵のひとつではないでしょうか。いずれにしても、医療や薬のリテラシー向上は、100歳時代の課題であることに間違いありません。

## ——健康や医療・医薬品に関する、極端であったり偏った情報に対する共同ステートメントを発表するなど、協議会は適切な情報環境整備を呼びかけています。

インターネットやSNSは独自の世界観を持っていて、当たり前の情報は受け手の



目に留まらず、装飾された発信のほうに飛びつきやすい傾向があるように思えます。

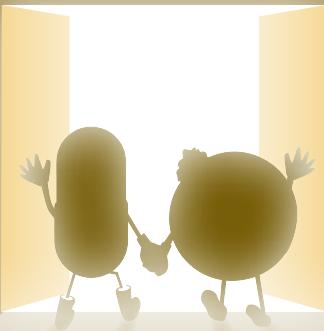
とりわけ医療に関する情報は、自分のことになるとその収集意欲は急激に高まります。不幸なことに、間違っていたり根拠に乏しい情報などはそういったときほど簡単にアクセスされてしまいます。

共同ステートメント発表(6月号P.8参照)の際、記者として「こんなに素晴らしい企画を実施しているのか」と感銘を受けました。長年情報を発信してきた立場による社会的な責任として、「産経新聞に書いてある」ことで信頼できる情報を伝えることができるのであれば、その立場を十分に活かしていくなければならないと思います。

## ——企画の今後と協議会への期待について教えてください。

今回の企画で最も大切なことは読者に「我が事」として感じていただくことです。数多くの記事の中で、どうやって読者の方の目に留めていただくか、ここが課題です。また患者さん・一般の方が医療情報を取りにいくことは限界があると思います。やはり身近な専門家に相談していただくことが、最適な医療情報へのアクセス方法であることを発信・啓発していかたいですね。

協議会には、製薬企業が個別ではできない医療用語の解釈や添付文書の読み方などの解説を期待します。そうすれば、きっと一般の方の助けになるに違いありません。(取材・文:薬局新聞 小幡 豊和)



# トビラの 向こうへ

このシリーズでは、さまざまな団体や組織の活動をお聞きし、協議会との共通項や、新たな連携を見据えた活動の可能性を探ります。

今回は、妊娠中・授乳中の女性のサポート事業に力を入れている一般社団法人 愛知県薬剤師会のトビラを、協議会の小冊子「妊娠・授乳とくすり」制作チーム（くすり教育・啓発委員会）が叩き、お話を伺いました。

## Door 02 一般社団法人 愛知県薬剤師会 誰もが相談できる環境を… 妊娠・授乳サポート薬剤師が活躍

### 相談の電話が 鳴りっぱなし

「2010年9月、電話相談を始めたことが中日新聞に掲載されたこともあって、妊娠中や授乳中の女性からの相談の電話が1日30件以上。どれだけ必要とされているかを痛感しました…」。当時を振り返るのは愛知県薬剤師会の薬事情報センターで、相談対応を担当していた竹林さん。

妊娠中に薬を飲んだら赤ちゃんに悪い影響が出ないか心配だ。妊娠に気付かず薬を使ってしまった。薬を飲みたいが、飲んだら授乳してはいけないのか。2006年、愛知県薬剤師会のほか、愛知県健康福祉部健康担当局、医師ならびに病院、大

学、薬局、卸の薬剤師で組織された研究班の調査からは、女性たちの強い不安があぶり出された。これらの不安の相談先として圧倒的に多かったのが医師、次に多かったのが家族や友人である。同じ調査では、相談を受ける医療関係者側の戸惑いも明らかになった。必要なのは、適切な相談先を女性たちに伝えること、そしてそれを受け止める受け皿の強化だった。

### 女性と子ども、 双方の健康の確保を

研究班は3年をかけ、医療関係者向けに問い合わせの多い薬物・疾患やよく使用される薬剤を説明する「妊娠・授乳と薬 対応基本手引き」や、相談された際に参考にできる「Q&A集」、女性たちに渡すためのパンフレットなどの資材を次々に作成した。

これらの資材の中心となる考え方は、「妊娠・授乳中の女性と子どもの双方の健康の確保」である。子どもの安全だけを優先し、女性の健康を犠牲にすれば、結果として子どもの健康も害する危険性があるからだ。このように、まずは相談の受け皿となる医療関係者側をサポートする資材づくりを進める一方、医療関係者向けに研究班メンバーが講師を勤める講

習を開始。このとき始めた「あいち・くすりフォーラム 妊娠と授乳中のくすりと母と子の健康」は今でも継続され、今年で10回目を迎えた。医師、薬剤師、看護師、助産師など多くの医療関係者が参加する。ここで「手引き」などを配布している。

### 不安の受け皿は「妊娠・ 授乳サポート薬剤師」

もう一つ、女性たちの不安をどうキャッチするかを考え作られたのが「妊娠・授乳サポート薬剤師」制度だ。「妊娠・授乳サポート薬剤師」とは、愛知県薬剤師会が独自に定めた研修を修了し、妊娠・授乳中の方からの相談にのり、適切なアドバイスができる薬剤師。県薬剤師会が養成講座を開講しており、全6回の講座で実戦能力を磨く。養成講座の講師を勤めてきた酒井氏によると、毎年、50人定員のところ100名の応募があるほど人気だが、トレンディングの質を下げるわけにはいかないため定員はこれ以上増やせないという。

### 地域に踏み出して

妊娠・授乳サポート薬剤師が増えても、知られなければ相談も来ないし、不安を



竹林 まゆみ氏



酒井 隆全氏、中野 雅則氏、大島 秀康氏

解消することもできない。もっと知つてもらおう、自分達から出でていこうと考えた。

県薬剤師会では、サポート薬剤師を周知するためのポスター・ロゴマーク・名刺サイズの紹介カードを作成し、サポート薬剤師に配布している。いずれもサポート薬剤師の名簿に簡単にアクセスできるQRコードを掲載。妊娠している方に紹介し、いつでも力になること、相談を受けられることを伝えている。

これらのポスター・カードは保健所・保健センターにも配布するほか、母子手帳にQRコードを掲載しているところもある。



ロゴマーク付きステッカー



紹介カード

また、厚生労働省が進める「患者のための薬局ビジョン」を推進するための委託事業として、保健所などが主催する母親教室や6か月健診に「妊娠・授乳サポート薬剤師」を派遣はじめたのが2016年だ。5~10分程度の時間をもらい、妊娠・授乳中の服薬の注意点等に関する簡単な解説と薬相談を行う。昨年度は当初の4地区から7地区に拡大、今年度は10地区を予定するなど、順調に規模を拡大している。

## 1万部を独自に印刷

各地区でサポート薬剤師が話す内容の担保をどうするか。そんな時に目にしたのが、業界紙に掲載されていた当協議会の女性向け小冊子「妊娠・授乳とくすり」の記事だったという。

2016年10月に公開した、当協議会の女性向け小冊子は、愛知県薬剤師会の女性向けパンフレットの内容も参考にしながら、専門医の監修を受けて制作したもので、基本コンセプトである「妊娠・授乳中の女性と子どもの双方の健康の確保」も両者に共通している。そのような背景で、この女性向け小冊子は県薬剤師会で1万部が印刷され、母親教室の参加者に配られるなど、積極的に活用されている。

「5~10分では妊娠中の薬の服用や、もっとも気を付ける時期、痛み止めや便秘薬に関するなどエッセンスしか話せません。その代わり、この小冊子を持ち帰って他の部分も読んでもらいたいのです。愛知県版を配っても良いのですが、これはよくまとまっていますから。」と、母親教室の講師を数多く務める大島氏はいう。



寺門 千佳子委員（大正製薬）、木村 真弓委員（東和薬品）

## 愛知県薬剤師会と 妊娠・授乳サポート薬剤師事業

1889年 愛知県薬剤師会創立

2010年 妊娠・授乳サポート薬剤師事業開始

### 妊娠・授乳サポート薬剤師の役割：

妊娠・授乳中の女性の疑問・質問に対し、適切な情報源を利用して適切に判断し、適切なコミュニケーションをとてサポートする。また、医療関係者へ適切なアドバイスを行う。  
サポート薬剤師数：331名（うち県外51名）

[2018年8月現在]

「母親はもちろん、父親も熱心だし、保健師や助産師も非常に良い反応です」。母親教室がきっかけとなって多職種とネットワークが出来、その後の活動がスムーズに進む場合も多いという。ここから地域との連携が生まれていくのだ。

## 県民全員に知らせたい

「妊娠に気付かず薬を飲んでしまったという相談が多いように、妊娠してから知るのでは遅いのですよ。」妊娠4週からおよそ3か月間は薬の影響を受けやすい時期である。同時に妊娠に気づかない人もいる時期だ。妊娠する前に知り、備えてほしいという気持ちちは、当協議会も同じである。

大島氏は、妊娠・授乳サポート薬剤師を「県民全員に知らせるのが目標」と言い切る。今では、県薬剤師会への電話相談も落ち着いているそうだ。これは、妊娠・授乳サポート薬剤師の、活動の成果に違いない。

### 愛知県薬剤師会より

愛知県薬剤師会では、妊娠・授乳サポート薬剤師を始め、スポーツファーマシスト、禁煙サポート薬剤師など、薬局・薬剤師が様々な分野で活躍できる専門性を有していることを地域の住民に発信しています。

（愛知県薬剤師会 事務局  
中野 雅則氏）

# 患者さんと医療者の



このシリーズでは、看護師、保健師でもあり「コンコーダンス」についての著書も執筆されている安保 寛明氏に、患者さんと医療者が良好な関係を築くためのノウハウを全3回のシリーズで紹介していただきます。

第1回目は、コンプライアンス、アドヒアランスといった用語との違いも含めて紹介します。

## Series1

# コンコーダンスという考え方

コンコーダンスという言葉は、“一致”または“調和”などの訳があてられる英語で、薬物療法の処方者（医師）と説明者（薬剤師）が、患者さんの強みや権利を重視する考え方です。

## コンコーダンスの特徴

1.  
患者さんと  
医療者の  
考えの一一致を  
見出す

2.  
お互いの  
意見や主觀を認め、  
尊重関係で  
接する

3.  
処方と服薬に  
おける  
共同意思決定

## 患者さんと医療者の考えの一一致を見出す



### コンプライアンス・アドヒアランス・ コンコーダンス

患者さんと医療者の考えが一致していれば苦労しないのですが、患者さんが副作用や飲み忘れを気にしている場合には、患者さんと医療者の見方にズレができるかもしれません。副作用が気になる、服用回数を減らしたいなど、患者さんが服薬について

違和感や後ろ向きな考えを持っていると、医療者の「飲むべき薬を飲みたくないと思っている患者」という見方が対立関係を作り出す可能性があります。

患者さんと意見が食い違っても治療を優先する“コンプライアンス”は救急に限定された考え方ですし、患者さんの理解や熱心さを前提にするアドヒアランスの考え方は急性期では重要ですが、治療ありきになりやすいという特徴があり、薬の適正使用



あんぼ ひろあき  
**安保 寛明氏**

山形県立保健医療大学  
大学院保健医療学研究科 准教授 博士（保健学）  
看護師 保健師 精神保健福祉士

**Profile** 岩手県生まれ。東京大学医学部健康科学・看護学科卒業後、看護師・保健師資格を取得。その後、東京大学大学院医学系研究科を修了し博士号（保健学）を取得。2015年まで岩手県盛岡市で精神科医療機関の管理職として復職支援や訪問支援の統括を担当。2010年に「コンコーダンス」という本を執筆したことが、自分が患者さんやご家族と関わるうえでとても役立った。現在は、大学で看護師になる予定の学生に心の健康と面接技術について教えている。

### コンコーダンスと類似の概念

Compliance コンプライアンス	Adherence アドヒアラنس	Concordance コンコーダンス
順守	積極性	調和・一致
救急医療が源流	HIV重症化予防で一般化	高血圧・精神疾患などから一般化
1980年代にComplianceという表現が患者の権利を迫害するものだという意見があり、Adherenceに言い換える動きが生じた (WHOでは、Complianceという表現を行わないこととしている)		薬物療法以外による予防が注目される領域での、健康習慣の所在を当事者におく考えが発端

に向けた患者さんの参画がしにくくなってしまいます。よって、回復が進んでいる患者さんや慢性疾患の患者さんについては、患者さん自身の考え方や価値観と治療が一致していくコンコーダンスの考え方があります。

### まずは相手の思いを受け止める

コンコーダンスの考え方では、患者さんが服薬について違和感や後ろ向きな考えを持っているときには、「医療者も患者さんも、患者さんの健康状態と生活が良い状態で続くことを期待している」という共通認識を再確認します。

このように共通認識を明らかにすると、飲みたくない理由やその理由に至った経験を患者さんから聞きやすくなります。患者さんからの語りを整理することで、患者さんに副作用の情報提供をすることが望ましいのか、患者さんの不安を軽減するために温かな言葉をかけることが望ましいのか、などの薬剤師か

ら行える援助が明らかになります。

また、その際面接技術として「相手の言葉を使う」ことを行えば、患者さんの言葉を否定せずに受け止めることができます。

具体的には、相手がカルシウム拮抗薬の処方説明を聞いて「私、グレープフルーツジュースが好きなんですけど…」と打ち明け話をした時に、相手の発言を「なるほど、グレープフルーツジュースがお好きなんですね」といったん受け止めることです。

受け止めることで意見の一一致点を明らかにでき、その後の支援や助言は相手に受け入れられやすくなるはずです。ぜひ実践してみてください。



次号の第2回では、「お互いの意見や主觀を認め、尊重関係で接することについて紹介します。

## 患者さん・一般の方向け情報資材

# 「バイオ医薬品ってどんなもの?」公開!

### バイオ医薬品適正使用推進委員会

バイオ医薬品適正使用推進委員会は、患者さん・一般の方向けの資料「バイオ医薬品ってどんなもの?」PDF版を今年6月、協議会ホームページ(以下HP)に公開しました。バイオ医薬品の特徴や注意点についてQ&A形式でまとめたもので、2017年6月に公開した医療関係者向け「これだけは知っておきたいバイオ医薬品」に続く啓発資料となります。



こんな疑問にお答えします!

- バイオ医薬品にはどのような特徴があるの?
- バイオ医薬品はどのように製造されるの?
- 自己注射する際の注意点は?
- バイオ医薬品の副作用は?
- バイオシミラーってなに?



PDFでダウンロード!

QRコードをスマートフォンやタブレット端末の  
バーコードリーダーで読み取ってください。

[https://www.rad-ar.or.jp/bio/index\\_ippan.html](https://www.rad-ar.or.jp/bio/index_ippan.html)



### バイオ医薬品の特徴と注意点

バイオ医薬品は低分子医薬品(一般的な医薬品)では十分に解決できなかった疾患への効果が見込まれ、アンメット・メディカルニーズを満たすことが期待されています。使用に際しては一般的な医薬品と同様に、自己判断せず医師の指示に従って適切に扱うことが求められます。バイオ医薬品の中には自己注射が可能なものがあり、通院頻度が少なくて済むといったメリットがある一方で、正しく自己注射する手技を身につけたり、薬剤を適切に管理したりする必要があります。薬剤を強く振ったり、保管条件(多くは2~8°C)が守られていないと、タンパク質の構造変化や凝集が起こる可能性があり、薬剤の有効性・安全性に影響することもあります。そのため、一般的な医薬品ではありません気にしてこなかったような、患者さんやご家族の方にどうしても守っていただきたい注意点があります。



### 資料作成の背景

主に薬剤師を対象としたランチョンセミナーでのアンケート(2017年7月)、バイオ医薬品を処方する医師へのwebアンケート(2018年3月)の結果では、バイオ医薬品による治療を受ける患者さんに対して啓発が必要であること、まだ理解度が低いこととして「薬剤費」「安全性」「薬剤の保管・廃棄方法」などが挙げられました。

個々のバイオ医薬品については、患者さん向けの情報資料が作成され、作用機序や特徴的な有害事象、取り扱い上の注意点などが分かりやすく解説されています。しかし、「なぜそうするのかーそのようなことが起こるのかーしてはいけないのか」まで解説されているものは多くありませんでした。また、これからバイオ医薬品による治療を受ける可能性のある患者さんや一般の方は、そのような情報資料を入手しにくい環境にありますし、そもそも「バイオ医薬品とはどんなものだろう?」といった疑問に答える資料もありませんでした。

このような背景から、当委員会のアドバイザーである石井 明子氏(国立医薬品食品衛生研究所 生物薬品部)、若林 進氏(杏林大学医学部付属病院 薬剤部 医薬品情報室)監修のもと、患者さん・一般の方向けの資料を作成し、活用のしやすさを考慮して協議会HPに公開する運びとなりました。



### 今後の啓発活動

医療関係者向け、患者さん・一般の方向け資料の認知度向上のため、協議会HPへのアクセスを増やす取り組みを行っていきます。また、これら資料と連動したセミナーも開催していきます。本情報資料を軸に、当委員会ではバイオ医薬品を使用されている患者さんはもちろん、今後使用する可能性のある患者さんや一般の方々の基本的知識やバイオ医薬品リテラシーの向上を目指します。これが各社の行う製品ごとの適正使用推進活動と協働することで、バイオ医薬品のベネフィットが最大限に發揮され、リスクが最小化できるものと考えています。



# 黒川の手帖

黒川理事長のつれづれなる日々の様子をお伝えします。

# 打ち込むもの

一般社団法人 くすりの適正使用協議会 理事長

**黒川 達夫**



日頃の慌ただしさは相変わらずだが、それでも永く手がけてきた趣味などに目を向けると、やれやれ休むところにたどり着いた、という思いがする。ある先輩は旧い辞典、それも江戸時代に人が手で写した辞典などの収集が趣味のことだ。夜中に書斎で開いて先人の苦労に想いを拡げ、ニヤリとするのだそうだ。珍しい絵の具が手に入り、「これで紅葉の奥多摩を描いてみよう」とカレンダーに書き込んでみたり、はるか外国の放送を受信してベリカードを集め「あの頃は太陽黒点活動がおだやかで、ずいぶん稼げた」とふり返ったり、いろいろある。だがポイントは孤独に飛び込み、訓練や習熟が必要である時間集中が求められるところにありそうだ。

一生は約70万時間、1,000×700の画素はどんどん上塗りされる。自分が選んだことに没頭し、苦心や達成をつうじて自分自身を肯定し、そんな自分が好きになること。こんな時間の使い方は実に実存的で、再生だと思う。考えてみると70万画素のキャンバスはお一人さま1枚限りで、

描き直しが利かない。社会の24時間化が進み、SNSが間断なく飛び込む今日だからこそ、一人の個人として立つ瞬間が要ると思うのだ。キャンバスには色彩が飛び跳ねていた、とふり返るためにも、打ち込めるものは大事だと思う。



## PICK UP TOPICS

直近数ヶ月間に行われた、協議会の活動の一部をご紹介します。

### 薬剤疫学入門セミナー

(2018/7/12, 27)



### 日本在宅薬学会学術大会

(2018/7/15-16)



### くすり教育出前研修

(2018/8/26)



協議会ホームページで活動状況を紹介しています。  
過去の記事もこちらからご覧いただけます。

<https://rad-ar.or.jp/blog/>



薬についての  
**ソボクは  
ギモン**

薬局でもらった薬が2つの薬袋に入っていました。  
1つにまとめてもらうことはできるでしょうか？

**答え** 色々なケースがあるので、  
薬剤師に相談してください。

薬袋には、単に患者さんに薬を渡すためだけでなく、適正に使用するために必要な情報が記載されています。また、これら記載すべき事項は“薬剤師法”や“薬剤師法施行規則”で決められています。そのため、飲み方・使い方が異なる場合は薬袋が別々になることがあります。複数薬袋がある時は1つにまとめず、使ったあとは残りの薬を元通り薬袋にしまい、使い方の間違いを防ぐことが大事です。もし分からなくなってしまった場合は薬剤師に相談してください。

ところで「御薬袋」または「薬袋」と書いて「みない」と読む苗字があります。その由来は、武田信玄の落とした薬袋を拾って届けた百姓が、袋の中を見たかと問われ、見ないと答えたことで薬袋姓を授かった、また、無病長寿の里では薬を見ることがなかったので「薬袋を見ない」から「みない」と読むなど諸説あるようです。

袋が別々なのは意味があるのかな？



## 一般社団法人 くすりの適正使用協議会の現況

### 協議会をささえる会員

#### 製薬企業会員 23社

- 旭化成ファーマ株式会社
- アステラス製薬株式会社
- アストラゼネカ株式会社
- アッヴィ合同会社
- エーザイ株式会社
- 大塚製薬株式会社
- キッセイ薬品工業株式会社
- 協和发酵キリン株式会社
- 興和株式会社
- サノフィ株式会社
- 塩野義製薬株式会社

- 第一三共株式会社
- 大正製薬株式会社
- 大日本住友製薬株式会社
- 武田薬品工業株式会社
- 田辺三菱製薬株式会社
- 中外製薬株式会社
- 東和薬品株式会社
- 日本新薬株式会社
- ノバルティス ファーマ株式会社
- ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
- マルホ株式会社
- Meiji Seika ファルマ株式会社

#### 賛助会員 6社・1団体

- 株式会社EMシステムズ
- 株式会社グッドサイクルシステム
- シミック株式会社
- 株式会社ズー
- ソニー株式会社
- 日本OTC 医薬品協会
- 日本医師会 ORCA 管理機構株式会社

#### 個人会員 6名

#### 特定会員 174社

(五十音順)

### くすりのしおり®登録状況

(2018年8月末現在)

日本語版：16,111種類 (+269)

英語版：7,952種類 (+443)

\*カッコ内は4月末の数値からの変化

### 会員募集中！

協議会の趣旨にご理解を賜り、新たなパートナーとして参加いただける会員\*を随時募集しております。

入会の詳細につきましては、以下までお問い合わせください。

\*企業、団体、個人を問いません

URL : <http://www.rad-ar.or.jp>

E-mail : [info@rad-ar.or.jp](mailto:info@rad-ar.or.jp)

電話 : 03-3663-8891

FAX : 03-3663-8895